小栗外傳

二

ヘ 13
3293
2

へ13
3293
2

寒燈小夜話　小栗外傳　卷之二

東都　絳山獸醜陳人戲編

第三編

鳴鳩と射て小年婚を約を
鮎と網して勇士命を落を

斯て其日ふるひしが。小栗満重。小次郎が伴ひ。名武が館ふ至りしが。
為て侍まうけ。ことなりなれば。馬光かがりかく喜び。多くは歓待る。小栗
親子ハ主が慇懃なる饗応ふ。感しく。園の裡を徘徊。その風色を賞る。
酒盛なるに。撫の今年いとなく色はさりぬれば。その盛るに何よ譬へん
方もなふ。園池の岸辺を笑く棣棠よ人。芙蓉なる色し。水ゐ行む鮭ハ尚
うらふ。折どころる百禽のこれふ對して鳴るさま。世の中れ言ハ。ぐ此地方ニ
あること思られてその折ら池ふ。いろくの奥ともの落を生ら捨び

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部

さるゝと何方ともなく一雙の時鳥飛来りて。啄きんとせるをぞ。主の篤光是をたゝんとて。悪き名れ付るをうしなふ。誰ぞあるあの名射よとありければ。あるふ者あり。是の光の妻男横山太郎安秀とゝふ者あり。足に付従が出るて故に武蔵國の一領主となりしの為人財悪狂戾はして驕強く。朋輩を忘れ。民を逆使こと深くして大なる怨ぶ。其民暴逆の命を絶ずして屢後舎へ嘆きを訴へ。

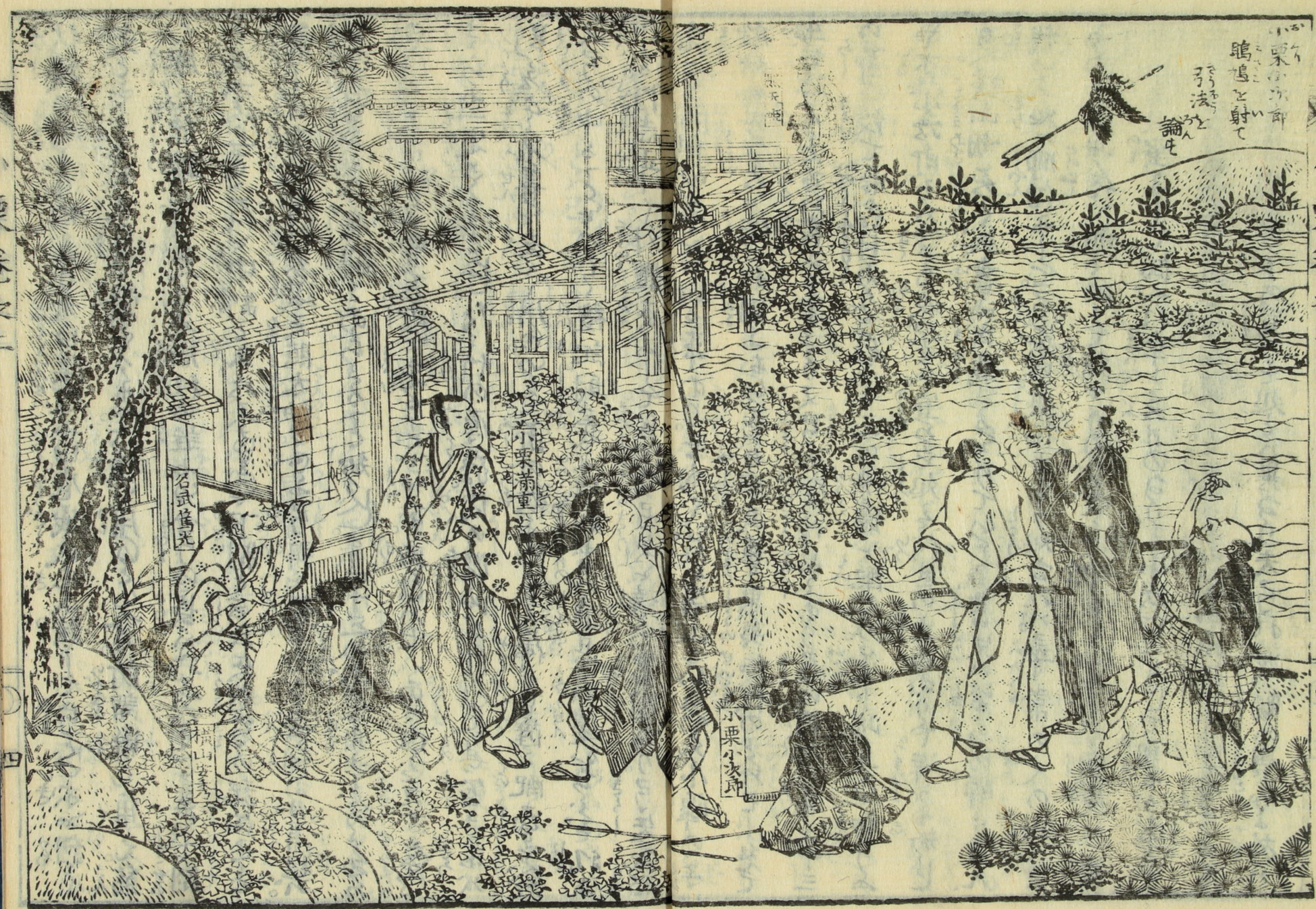
慈永三年前の夏頃氏満公は鈴氣と蒙り采邑の地を放されぬ世のゝぶぞまひとりかまて。好聟なれば名る光の身を寄て再び舊領を復さんことを計りける。然るに今日しも小栗殿の家はれば。殺行の為に宴席を連りてこゝふ有りけるが。只今篤光がらふどゆめひく。某此名を射留て一矢に添んと。いとをとりがふ云ひく。日比の恨重藤の弓に慈尾矢に引ゝまで弾絞り。ひやうと放てぶこそいうに時鳥あり中らぬ。ぶして横の技に射落しゝり。安秀は篤光

射損じ。前の度言ふ所似ゝくも形くいと面目なげに立ちり。その立篤光。小次郎に對ひ。足下の射るゝ所は豫て恵りぬ。あの時鳥射るゝ。小次郎に對ひ。足下の射るゝ所は豫て恵りぬ。あの時鳥射るゝ。

すんやとゝふ。小次郎完示とし。未熟の某いうぞ志とあいへんさりながら宜ふを旨と辞すゝふ。公奥に礼なるれば。弓矢を取て。横の木陰よりかくろとして。時鳥の下るを待ふ。前の矢に懲もせぬ。又も奥と呼んと池の汀に飛下るを待りうけゝる小次郎。矢に近くなる所に。觀定て放ゝ矢に。名るのたぶるゝ射もたゝるぶ。行の方に落ゝり。人ゝこれ成るるゝも。嗟射ゝりやくと呼ぶる声。少刺ぶよこて散ざりに。篤光深く小次郎が射義に感じ。嗚呼後世おそるべとゝ足下のことゝり。まゝ手孫と思ひきや。斯ぞり射義に老練なるひとを武士の矛ふとりこしふるこてゝ事やあれ赤ゝのこあれ少年やと。

孫薬こそれば接山は赤毛人の弟と妬むりのうまれば我射技ならば賜はるを
小次郎射とられ易うふべ想ふ合る光小次郎弟ふうく感賞と新
ゆめ拙きことかぎりなれど何ともこれぞきかうは色。されども此ようにこそも
ひりぎこの小冠者射とは少く善とれ。故実のごとれそいうぞうい
知べき我その故実を述べ。彼を感服さし今日の恥辱と雪ぐべきと心ふ
念じ。後こそ生くこそ。小次郎どの〻位光景ふいんふ古の牛若丸
ふももさく劣まいとそぞんじ。かどより射藝ふ縋流ものを故実
をきそぞ知ぬしもしてゆる我ふあふ説ゆしのくと云へば。小次郎。こふおりひも
かけねこと弟ふるのうれ。少しくゆめけるともものくど弓矢の道とりて表と
ふ事ふ長者のれ系ふ。もほうけるれとをゆくきふあ〻ぞ此事免さし
給へと固辞されば接山ゆふ。某射術ふあれいと下手用ふこも年

老ぬれば。祖故事ふ知る事あり。そもく弓ハ唐山ふおいて。小鰐の子。
般始のこう天と作る。我國ふおいてハ日本武尊東夷征伐のとれそ。弟
生ふこうと古記書ふそえり。又弓の製作品ふ弓の内外の弗ふ十三
の節ふ設て名目あり。これふ十三の佛體と配せり。足下此事と知ふ
や否。小次郎。そハゆも及ばぬ。宜ふと処を何ぞの出ふありや。詳ふ知し
ふ接山嘲笑ふ云。書ふ出載しふ
我いふ処ハ師傳ふして。弓家の奥秘とする処なれば。尋常の人の知べき
あふふ。此傳ふ知ふして射るのハ。あふへ中るといふとも。闇夜の礫
ふ。大の志れ蛍ふして。はづれ幸と云るのうりと小次郎ふとして朝るがごとく
こうこうハ。小次郎これと少ふ憑くべ。某が業ハ至ふ赤熟ゆして少ふとも
こうとしくと。足下の宣ふを処とハ異ふり夫弓ハ盥鰐ハ唐山ふ於ハ。


小栗兵部
鵠鳩を射て
弓法を論ず
小栗蒲車
名武舊光
小栗小次郎

伏犠の射より始まる。大白陰経に曰。庖犠氏木を弦として弓となし木を刻て
矢となすと云云又弓を製するに六材を用ひとなり。所謂檿丁用し筋
と。膠と。絲漆と云へり。又周礼の註に弓の長さ六尺六寸。これを上制
と云。六尺三寸これを中制と云。六尺これを下制と云云天朝弓の起はこと
舊し。日本記神代巻に天照大神弓弭を振てこと云事あり。再れば。
日本武尊の御歌に濫觴よりあらざること知べし。また十三の節を用ひこの弓
これを上古の弓。晋て節を定ることなを或ひは七八あるひは九十に至る。
さらに一定さることなし。たゞ竹の厚薄肉の濃淡に依て其宜きを用ひ
割て善を去て善を用ひ。いにしへ節の教に深くこれり。佛菩薩を配あるべし。
又弓の中ることを云へり。禮記射義に曰射者は進退周還かならずして礼に
中る。門志正しく外體直くして然て後弓矢を持て審固なり。弓矢を持

て審固なして然て後以中ことを言べし。此以徒行を觀るべしとあり再る
所に中ることは己が心を身と共に修むるにあらん。いにしへ弓は名所を知ふあらん。
と言静に述てこれに對する言葉。赤面して居たりし小栗
満を。小次郎を端と白眼汝幼弱にして。大人の御前を狂ふに。漫に言を
放ちといとれば。と毎に甚罪を謝て此席を退べし。言あらんかぎり
これば。小次郎は父の怒を畏れ。あらしく席を退出んとすると。主の兄光
小次郎が文武の道に賢きを。心中に感賞されば慌忙これをさまめ。小栗
どの御怒さることはなべ。これはたゞ一時の雑談のみ。ふつゝかなるを
もつて狂て見しあしなと云けく。横山を顧て足下主うとして礼戯
言とりけるふよう。客人の御言葉を接せり。さてその罪恐謝しかとあり
けるに横山心裡に会念つゝもの。驚光が言葉を聞しかなく。小栗殿を對し。

某よしなき言をのべては気色を損ずることいとも甚し。只今の言は酒狂のうへの戯言なり。仏に誓ふのみぞは免めて今一杯をきこしめせとありしぞ。小栗親子もさすがに云るさかりく後悔し。是まで恥て泥ねれば。互にこころうち解く。まことも酒宴を催しけり。されども横山は前にある有様を射後に渡又論にけじめられ両度まで恥を受ければ影護て何となく其の席を退出なり。それより足横山小栗に仇せんと想ひ心そこみ発端あり。斯て気の毒ある時。篤光小栗に對ひて申さるゝは今日の酒宴あまりの興にしひとなつかしく侍れど。女児にては照天が一曲をば御耳に入んはいかにやぞとぞ申ゆゑ給へ。満重喜び令愛の琵琶に堪能なるとは。謙く風声承りたれどもその曲をまださゝず。この遺恨に思ひしに。今なる幸ひなり。とくくと乞れければいざさらば這裡へ伴ひなくと奥まりなる下へ伴ひ。更に酒肴を出し。

饗應なり。此時篤光の妻は侍従女児照天姫を伴ひ。各々一面の琵琶を齎らし出来て小栗親子に對ひ邂逅なるに。ほのかけなくにと不興つをさなるなり。と言と云なかながらへれば。小栗は前刻よりさぞくと慇懃なる饗應に飽られとのべさて照天姫に一曲を所望ば侍従は微笑て。女児が琵琶は。よくも弾べからず候ば。ゆえまのにでも鳴呼がましけれど。望まし給ふを辞はいかにぞもれなるれば。命にまかせぬつかする一曲はきゝしまの。ふせんとそれくとめぬ。照天姫は心を凝く。琵琶うちならし今様一曲を唄ひなるに其声微妙にして。人をしなく感動させければ小栗満重ふかくその貌のとゞれし感愛し。此女児をりて小次郎が妻となしめがど。時節遇ばかと頻に念じ。只願照天姫を称美すれば篤光其ところを推し。此秋をとて宿志をもとげんと言を正して云いでぬるは此席にして

関へ来ん人は誰〻ぞ。足下と某とは交ぶ。たゞ足骨肉のごとし。爾かあるに
亦又他門まれば。此交をもて子孫に伝へんこと。ようて思ふに足下は今郎
あり。我は女児あり。これをもつて夫婦とせば。家永く国城を治めん。此てこ
いうあるもぞとやと云ふ。満重こゝろ〻喜び。おろそかなると碍て云へりける。
某その心あれども。足下一人の令愛なれば。他に嫁しるまじとこゝろうち。
云ひも出さでなげしに。初宣とゝの不圖幸なりさるあれ内君のれうに組
いうふかとあるに。付従これをゆめて。さらねば夫の命と乖うぬへ妻さる
りの者なるに。奴家も嫌て。小次郎どの〻女婿あるかとおりへて喜びへ
ども。いざ憂くいおもひたぐらん。小次郎とのく。女児が赤縄を千代に
八くの代のさゞれ石の巌とうくんかるに契を祈をぐりねと回恵とるあぞ。
満重喜びて堪へど。小次郎にうち對ひ。我汝が室とあらせんとおもへど。
まだ幼弱にして且は兄弟なれば。其ものゝ有けるに。
今日不図も来る光夫人令愛をとりて汝が孫さんと宜へり。照天大姐氏と
いひし才親世に勝れ。人に汝ハいとゝ高運なれと。雀躍して喜べど。
小次郎も心の慈愛の冥加なきに喜びの色〻彩よ顔に。恐首してそ
居こうるに光夫婦を。小次郎が強弱をこそ。さてハ彼児も落ひぬ。
女児聡き姫ゆうち對ひ。此年迄き女婿を求と素しかど。是ぞ〻こゝろ人
もなくに心苦しく思ひたるに今日不図も。小次郎どの〻女婿とゝるゆ
ゑ。人縁人こそ亦有とのひ。南世潘金を並びなき紀式。両全乃小三郎
ぞ〻寸法云のごと既に今日鳥を射のへ。弓蔭の猟を知りぬれ人の
妻ゝのゝ女御后とゝるひしも同じ幸ぞと。今ようしては。小次郎どの〻
夫人とそれば。満重夫人に男なり。これを父ともこんなり。よく孝行ふ

かしづきて婦道を守るべしと。くりかへし〳〵て申さとすに。照天姫はいとゞ切なれども。これを心に存じてや。塵を払ひて回意とぞ微笑けるぞ殊勝し。かく満重も名武夫婦も。小次郎と照天の二人が喜びの色を面に顕されバ。ゆかしく喜びし小栗満重なる光は對ひ。今日は奈何吉日ぞ天此良縁を下し。名武小栗の家永く因を結ぶべしと。常言に善は急げとや所謂其日は良辰なり。今日に納采を贈り婚縁が固めをなしとあるなる光をさらに妻子も倶に諾ひて笑業の宴を催しけり。既に今日も暮けれバ小栗親子は別を告げ我家にこそは還りけれ。さて其日も暮しうが小栗がもとより納采のかず〳〵を整へ名武がもとに贈りたまへる光直ちに受納め。一門の人々並めるのうちに披露して。諾ひの宴を催しけり。此日横山安秀もこの宴席に連りたる光。小次郎を女婿にとはよしと聞て心裡憤りを発し。彼小次郎なる者は前日我に両度まで恥辱をあたへし仇人なり。其時の辨にくらべたる光目前に詈りけれバ我彼を恨む心ありてよく知りてぞ居らん。妻舅の讐と思ふ人を女婿にせんとするこそ心得難けれ。是をもて之れ次想へバ我を甲斐なきものと侮り。忽ち縁者の因を結び彼を婿縁を結ぶこそいとゞく怨まれさる蕩情の白痴なれ。我も又その因縁放ち此憤りを晴さでおかんと念じたるが。これより深く含る光を恨めど年来の故なきにしも恩あれバ明白に恨んこともなしがたく。兎さ角さ案じわづらひ思いとさるべき術もなかりしが。空く月日を送りける。然るに一ツ式派の浦詮秀と横山右郎安秀とハ甚志向しければ同気相合ていと親かりし所に一日横山。あるとき詮秀が館に行四方八方の物語りの折から前年佐々木が谷の観音堂を毀し。後に及びたるは一つの癖ありたるは其時の事光景とて。

小栗各武の二人、別白ふ少人上一ほどふ我家枚家ふ疑ふけくふふりうふ
幼君のほ代もされど尚故のごく近習の近人より。足ふ〳〵ふ小栗各武
ふ文へくれくれしいふ世恨と晴さんと云ふ。これふ此方人よと横山聴ふ
さらめて。少後郎とる光ふ恨ふめことの子細と語り我ふ方人〳〵ふらば。
望下の恨ふと時さぶしとあるふ詮秀長ひ。ふうふ這般〳〵にさぶ〳〵と。
密談数刻ふ及び。後ふ別ふて去ふり。不在話下。今年もふ仲秋の頃
ひひふりふれが相模川の鮎。ふ年よりも駿〳〵ふ鎌倉中の者綾彼ふ
ふ漁猟とる人多ふりふ。篤光原ふ魚猟と好ふの癖ありて四時の朝〳〵海
川の猟ふ。或ひふ鉤ふ。或ひふ網せふに近日人の風声知ふ我ふ彼ふふ行
くやと。其ふ猶備とふと横山窺ひ知てふれば一日ふる光ふ對ひ近日相模川
ふて。ふれ獲物ふるはしたふふふ。ふりてふれふ仕ふて漁猟せどやと存ふふ。

あやふふくせふひふんやとヤせば。ふる光ふ想ひきふけふことふればいと嬉げふ。
いくもやメえふふのふるさふぶとそ。ひさと従者と省ふ。僅ふ二人の下僕と
横山ふと伴ひ朝まだふより家ふを出ふ。ふくも相模川ふ至ふり。舟ふと流ふ浮べ網ふ
下ふて漁猟とふふ。実人のいふふふ差ふど。多ふくれ鮎ふ沢ふふ。ふる光斜
ふふふ喜び。尚網ふ下さんとふふふ。日ふや西山ふ傾ふれふば。残多ふくも還ん
ふふふと横山云ふふふふ。某も漁猟とふふふふ。幼稚ふりて好ふ伴ふふ。
幾回ふ此川へ来りけれど。今日のごふふふふふふふ。斯ふ射ふまふふふ
ごうもふし。今歩射網ふ下しふふふ。幾許ふ奥ふふ。ふふふふふふふ。
道ふふ篤光ふ横山ふ云ふ道理ふり。又斯ふ射ふふふ遠雑ふらんふ。又ふ舟ふ
棹さして四方ふ網ふて漁猟ふふふふふ。夜ふふふふふふふふふ。更風ふて漁舟ふふふふ
比及横山安秀東西ふ回顧。日今篤光ふ念ふふ網ふ下さんとふふふ。

横山安秀
名武篤光
相模川小篤光
非命死

揖とりて法腔を力おきはして撃ゐどふ何うへりて憾べきや。忽ち水中ふ
がたと落こうり。されども篤光武義水練に熟せーよ夫るれば水と游ひで上
らんとすると。横山安秀揖とりて連打よ撃るれば可憐篤光打物取くへ
鎌倉中ふ二とへ下らねりのるれど不図水中ふ落こうふ且教こふ舞まれ
これば。仏へ猛くありるがら。終こへ水中ふ溺まて失ふ々れ足佐く女が谷の
篤がいひたる事。こてふまこ甚一ッと飽せり。篤光が下僕二人こそ主の
最期を看て愕然と驚き。いうこもせんとぐ武部ふ個然と〜〜居
こ次横山安秀こへ後の害ゐりと前よ居りし下僕こそ。援ゐもこ足
せと両断とる。後の下僕も逃さじとまこ斬けくはを刃とりし避ん
とせーが過失て川ふざんぶと落浮こもかぐで失よりり。横山元ふと
うち笑へ。獨語首。目今斬殺〜〜る下僕が死骸よ石を包して水中ふ
投入れ水中の血武灌ぎ洗ひ又舟と巡てぶし。篤光が屍と泅りて引揚
已上が衣裳とるふ泅し。全く溺死て舟と岸よ上げ。
篤光が屍と脊よ負ひ鎌倉さして急きり。横山が好計ふ悪むべ足こと
鎌倉よ還り。奈何こと。そ次編ふ分解と流て知りるへし。

第四編

横山僕計と一色よ謀ふ
結城実事と家杯ふ訟ふ

斷く横山安秀が篤光が屍と脊負ひ。道と急ひで夜のうちふ名武が駿よ
還り来り。密ふ裏門武音るへ。伝従ハ夫の帰れ遅き武疑り。夜も
さぐらいも寝られで待るひーふ。密ふ裏門と叩く音の聞えれハ胸
うち騒き。自ら紙燭して走り出下僕と呼起て。雅そと問へ〜もの。横山
某なり。篤光どのいく酒ふ酔るへぬ。こく所るへとあるふたーふ横山

の声なれば。それくと門を敲ひしその身も門迫まりて出でうとする時。横山安秀。
夫篤光を脊負ひそるが。二人とも ひと濡れ濡れて帰りと着。いと寒うなる
横山すぐ世ちに卧而へて通る。付従の前ふ立て夜のあけしらる処へ
清川ぶ横山安秀篤光とかきあつと付従の瞰禊しき級をゝ。其傷を書
添て老角をふ。肌冷身かゝりて息絶て居ね時をとるるあるこゝく
いろ〳〵と繰るまゝひ我夫いふ者のふそと声のかぎり呼叫べと事きれるとい
回恵ひ付従の尚もせきたちて横山さうち繋ひ。あんこの知らざるこゝ
ふく北ぷいうる縁故ぞ諸り変ー称と問へど安秀うちこれ紫府回恵と
せざりしぞ。あつて涙ぞさらひ。其の人ぞ通り。篤光とのも某も別流しる
とりてぞふーの人。今日相模川ふ漁猟をとて。彼川ふ舟と漕ぐを通と徘徊。
徊ぞ下とて。一回も空ーきるのみ。漁猟をとる日も暮るあんとをれば。今日へ

これあて止めくとさくらーうどあまり獲物のこゝろふ心ひろれるひてや我諫
言聴ぞ更聞るまで漁猟せーか。後ふ身も労れ酒もも酔の人ぞ足の踏所を
踈失て川ぶざんぶと落るひね。こいのうあと驚きう。已ても甚きくあふ死
い。助け上てとせーうぞも。雨きはひる月新ふ。物のあやめも夜ぞ赤よ
此処よとこ寄ぬるうち。中村後ぞ遠ぞ流の末ぞて辛ーてかつぎこのげハ
揚されどもや奉きれて甲斐もな。舟ふ残せー二人の下僕ぞ。残ーきこのの
渉猟く。繰きまどふ騒ふ無し。篤光とのと某ぶ。夜服刀と奪ひ。何方
ともあく逃失ーう。我一舟ふ居るうち。篤光とのをあくも。溺らー死なと
田舎人なとそる恨をのうんどれど。坊主とのひ且へまと年況ぞ寄ーる
恩人すりいうで踈暑をそんどれ。力の及人限をそこーたれども。命運乃
そる処う詮ぞ。我姉上へのとれ。ふくふ兄人極ーう。そにあんく

急角のことせば妨多し。そは後日悔りかの赤心をば知らしはめんとぞ。
涙ぐましくうちうなだれ。さもぶ侍従は女なり。実ぐ為の肝計と巧しとは露
ちらぶ。年頃の恩は報んと。赤心をぞ吐ねとぞ思ひとり世も疑ぞ。
さて酔てのちの事ふるこは猿とりひさして夫の死ふるこうとて。
悲嘆の涙ふ沈こうり。照天姫もかとぞようこに走まつ父の死ふるこは
ようも。天は悲しみ地は嘆き。阿波ひつ法ふ流れ模山安秀とこの弟
たぶくと首よくも謀ふうとふ裡寝ふ話ひ。面ふ恵ふるこふ顕し。
鼻うちかこてえうけふ母子の嘆きふ道理ふぶら。当光大人既ふ斯
ふりまくへ家の浮沈此時ふり。女ふぶくも武士仮ふよく思惟まくし。
さらふ我一色詮秀とふ断金の交あり。彼人のことふ。当時法近臣ふ
頑人ふ。沈幸の人くうりも。君の恩ふぼくよく。且仁恵ふる性質ふ我

速ふ彼人と減て。家名とふんと思ふ。もんこのこうふ奈何そと真実く
笑ゆうふ侍後ふ不図夫の別ふとこうも知ぶ。只
よきふとのこと回恵て模山ぶ言ふ。模山ぶうとふ心ふ表ぶ。
一ふ人ぶ鈍ふ赴ふ詮秀ふ遭ふて。当光と殺ふる光景と詳ふ物語ぶ。
詮秀ふ喜ぶ。年頃悪しと思ひ一人ぶ失ひね。足足下の力なり。我足ふ
報ゆるふ足下とりて名武の恩頂戴押領きぶ。再せんと欲するふ。
まぶ為光ぶ這回の死とぶ上ぶ。其附男子ふれば。家断絶ふ。
公の法ふ。我君ふ勧めて照天ふ女婿とあぶ。山ぶ足下とりて家の
跡ふ立ぶ。此ふ家枝の彼ふ支へば。名武ふ家ふ立とも詮
ふ立ぶ。一ぶ家名ふ断絶ぶ。ふ附足下よく謀ふ運ぶ
ふ。其功とりて世ふ生ることふ。我ふ為ふ為ふ相ふ人ふ

横山
妖計
侍従
歎く
隠天
侍従

て元しの人と二人額をよりて尚さぬぐのことを示し合はねさて横山を立還り。
伯従は対ひてもりなれば某一名が鈍まり。注秀は遠あて這回のうみと
笑へりに好事門を出ど悪るを千里を走ると常言のごとく速くも来る光
天人横死の事。四方の四笑を入れるよし注秀我は語りやすくねば。
陰をとる陰さされど。此上は横死のるを明白に笑へゆげ。そは沙法を
待より外は拠なし。されども名武の家名亡びさは毎うとがよくも頼み
置けるが悪きるは伯従に嘆の中み此事成
ばいかの心は無べきはめ〳〵と血属のりる結城六郎朝光
迫きは泣く来る光横死のこと且横山が語り出しることをなく来るし。
奴家は女子のなりあんとなを計らいしことは。のりるは持朝を
来る光の死を笑伯従新子が公根をさこそと笑ふ。そのは秋を要し

けるが。横死の光景を母くもは平へ笑へけるよしを笑。彩ては性解さべるを
めふびと。やがて牧事家枚安房ち憲実のをふ赴きし笑へけ彩を。
血属ふて名武来る光去日に相模川ふ漁猟をとめくるも水ふ溺て
亡びぬ。こを私は非命の死と逐ること。不忠の罪遁るが毎うやー。されば
妻子のりのは。いうるは名と命義ることも此て怨をなるやーいうるは。
名武へ古き家といひ。且は歯家ふ対ー奮功あれば。牧るの憐をとりて。
君の恩をよきふ云ば。家名だりとも立さしめるで。限なれ法恩ふ
べるしとうち嘆きけるを笑へ名れふ家枚眉をちのあ何とう宜ふ馬光溺
死せーとも。嗚呼めてふ武士を亡びけるこの方えさよ彼人は打物をくを
万夫の勇あり。ひきてる徐を行ることを人も知りけるふ。いうるれば溺死
とぶるーけるやらんそは産まれ角まれ。此事君ふ笑へあげ。おばをもりを

りて沙汰もなし。と朽朝を選ばし俄ふ伊丹ふまかり。君の元系ふ入くゃ
ゝ名武篤光事。相挿川ふ漁猟して溺死せる旨。血属注城朽朝
ゃんゝ人ふ告る光私ふ命を失ふこと。甚不忠ふべきやうなり。此科ふ領と
没収し。妻子を追放さるふ及べり。さめれ名武を名家の末なるふ且ハ舊
功のものなれば。僅ふを名跡ばかりも立きしのゝ。八州の諸大名君の伊
仁徳と感じ。東国まもなく昇平なる也。君をはとも宜ば
前ふ法例ふ付り。一人詮秀近ふ生く云ふ。名る光君の禄を食
ふぐら。甚多を放ふ。川狩ふ奥州ふ流つ。ふは不忠の罪。天網免
ふるゝ。非業の死と遂ふるゝ。さるゝの家を立ふんと。ふるべうも
ふるゝ。執事のゆゝ。ふ平にせんと甚怪なれば。我ふ計ふ
昔ふ今名る光男子ふ一人あり。年ふ幼稚なれば。彼女子成長
ふ魅るべき女婿を迎ふまで。篤光が妻の弟。横山安秀ふて名武が家の嫡孫
ともゝ。両全の浅ともゝ。奈何とふれば。横山安秀ハ名武ふ罪も
ふるゝ。倍者のゆゝ前年満兼公の御ふ背ふ。彼ふ罪ふ
ふ。ふ人ふ知ふ。再ふ名武が家を立ふんと。
政道正しかるべし。ふとりて横山と名武が後見ふ。横山が
罪のふども知ふ。名武が舊好ふも忘れ難ふ。仁慈のゆゝ
ふ人。さハふるべやゝ。憚ふ処もなくゝ。拾氏ふ年新ふ
全秀ふ。ふ処ふ変ふ。家枝憲実ふ対ふ。詮秀ふ
執事の位ハふ存ふと宣ふ憲実言ふ正ふ。横山ふ
前年武蔵国の一領ふ。民を治ふ。僻多く。百姓の嘆大ふ
さ人ふ諸士ふ対ふ。気ふ多く。止事なく。終ふその而帯ふ没収し

多人きこゝに誰くもよく知られぬ。いづれ彼をとりて名武が後見きし。浮所へ乃出任せべきなれば。狂く去らせば。諸士の公背れいつる不思議の出来ものんと竹へたもるふ。扨氏公は例ゐ付りつる。年老る人くゐ對のせまひ。我年初稚て模山は勃氣蒙し。附のゆをば。おぼろゐも知ぶ。独るゆがゆを処と。一はへが中をとゐと。何をゐ実で甚事中ゆをとゐぐと宜ゐをゐ。人くを違ぐ。とを独るの中は秀こを実ゐと。回意中せば。詮秀新をを変てゆをれゐ。未もその附のことをよく知ぬ。いづで偽をゆにべき。人くを独るゆの控威を懼き。斯たゆをとおぼゆなり。越高が馬をとりて。鹿こゐひゆ氏をゐ。めをぐやと。みがりきゐを逃るゐぞ。憲実これをゆて心中憤氏懐き。詮秀我をとりて越高ゐ比ゆ不臣の名を負せんとをるでゐ奇怪ゐと既ゐ甚を氏過言氏紀さんと。せゐがまをちゐ。今世処ゐゐかを急角を争ゐ君幼稚ゐ。独ゐ完まもせゐ。社ゐ名と。憚らと我控をと違うせんと。せゐれの行状をとゐゐれば。越高が名ゐ逃るとも。すを深巣が名を負ん足忠臣の道ゐと。想ひ久して憤りをたゝを詮秀が言をゐ。ゆうゐ知ゐて。君ゐ對てゆを氏。我くゐゆ吉ゐ汁らひゐゐ。君氏蔑ゐをる。ゐれゐり。此ゆ今日に定ひ。ゐゐ。君ゐ。ゐをゐ。ゐをゐ。ゐを疑。浮世家の法制を乱ゆひるとゆへ上ゐ。究ゐことをゐて浮家をゐをゐる憲実ゐふゐゆ。優実の良行やと感ぜゐりのもなりけりゐ。をゐゐ幼きゐ久詮秀ゐ我ゐゐと違ゐ。尚多ゐと。言ゆをゐゐ。幼稚ゐ在ゐ扨氏公紀ゐ一色ゐゆ処と足をゐひゐゐもゐゐ。独るゆのいひをゐ。ことをもゐを捨ゐ。明日憲実ゐ所ゐ召ゐ。明る独事のゆへをゐ名武ゐと。我熟ゐ思惟をゐ。彼ゐ家氏嗣ゐを男子ゐひゐ。旧法ゐをゐ。一回ゐを正領を没収ゐゐ。ゐれ名家のことなれば。女児照天成長ゐ后。

一色詮秀

結城の朝

さゝくきりの氏女婿とし。一の功をえべ。手附本領を遂ゝふへんと思ふゝ。
こゝいうあと宜いとふ。憲実これ紙文ふ些の曲且ることなる命なるべ
大ふ感じ。命まゝとに法ふ称くり。某もあゆて何とゝやいろん。厳命の
ほどと名る光が妻ふかふ。所領を没収しいろあと法所決まるく
我館ふ帰り。まゝ蜜ふ拵朝を近る命の旨を告知ふ浦伝とて。
ふ使の至るとゝ伝へ。とゝ伝へれば。持朝望を失ひたれど。厳命なるまゝ
[illegible]名武が方とふかくと知ふ甚浦伝志のへと思ふ行従
[illegible]これを使より。言も浦伝も失て。憂幻なく嘆ふ。これより前
撲山安秀が方と人ハ一色淦秀ふ云とゝ称い。豫てさうしゝとく
[illegible]下とりて。名武が家の援元さゝくく。君くさゆぐゝゆゝど。執事憲実
のさゝゆるにとりて事成とされ。されば照天成生の后女婿とめふとまゝ。

名武が家断絶ままべきふ。[illegible]日を待ゝとして使至ふく
名武が鈸とうけとゝ。後の謀れゝなゝ。此時油断なく計ひ。
とありゝるほどふ撲山ハ此告を受て心裡ふ想ふ。鬼角ふ行従母子
共欺き。何方へも倶して立退き。我ゝゝひとりて照天ふ女婿とゝし。
本領安堵ままとゝふ。名武が家を公のまゝく。夫よりもまゝ今此家ふ
貯ある金銀財宝を奪ハ。五三年ばかゝ。栄利を做ふ足るゝと喜ぶ
処ふ只今持朝の告ふより。付従親子が嘆くと省て信ゝゝるおりゝ。
[illegible]慰ひ折ゝゝ。小栗満重がゝとゝ消息して云こゝにるゝ。
這回篤光ゝの。不図ハ最期と逐まゝふ。兼ゝて語入てゆく人ゝの
ハ嘆ままべと察ゝをべゝゝ。まゝとゝゝらん今日法所ようハ使あゝと兼ゝる。
ゝ事ありもしゝゝんゝ。照天どのハ。小次郎が妻く。何ゝ苦ゝかゝん這程へ

恩ある人の兄も角もよし死に討たひまゐらするをせしといと頼母しく益々へ
けりなぞ。従順この書着をとりて。小栗が志氣のやさしさを喜び。むしろすゞ
小栗がゆくふ行んとあるを横山ちからをはなりけれバ。いとゞ婦人持ぬるの
告をひかめゝ女のや名武は名家のことなれバ一旦家を法によりて断絶
きとしぬど照天生長の后。志ある人と女婿とし。一つの功ありてば本領
安堵すべきよしの命のよし。君も深き旨あるを照天とりて。
小次郎は嫁さしバ君の仰にまで差そのこる名武の家を再興さする人ぞ。
これは老へはきまゐらずや。小次郎はよき女婿なれど兄弟もなき
別して且は所よ給事されバ。いふに乞とも。名武が家を嗣さるまじ。
よしなき縁にはなされて。永く家名を立ると忠孝とは至らじ。此
道理を弁へて小次郎と。照天とが。許家の約を変へさるべく人が素女

まくと理を尽して説ければ。女のあさはかに横山が欺き云ふぞ
露ばかりも知らずして。理の当然に心変り。照天姫ようち対ひ幸
既に今日に及びぬれバ。いかにも倣ず。家を再興するこそ孝の
道なり。よく〳〵其心得あるべしと父より照天姫へ初稚の且ども。
その志氣正しく一回許家せし小次郎と縁を絶んと父よりも。節を沈めて
泣けるが。漸ありていゝけるハ。生平に父母の宣ふを。忠臣ハ二君に仕へず。
貞婦ハ両夫にまみえずと。いふ本文あり。殊に小次郎に許嫁されし上ハ。是則
小次郎の妻なり。たとへいかなる事ありとも。他人へとりて妻となせそと涼しくも
教訓しまひき。其言の心に志み忘れずまでもゆかねば家の為と云
いひながら。貞操を守り姪婦と。世に謗らるゝ哀しさに対する術は係るぞ
やと。かきくどき嘆き給ひけれ。母は是を聞て悲しく。おのれ賢き我子やと。

俱に隨ひてかこち泣く。横山照天にうち對ひ。おそろしい哉道理ぞさり
ながら。かく迄不幸の身に臨こと。おそろしからず一ッにて家の浮沈は定むぞかし。
心をおちつけよく聞給へ。昔の言にも貞は操を破て貞婦の名ありといひておことを。
枕席を倶にせしにはあらねども許嫁なればその小栗と縁を断とても
いかで節を失ふ娼婦ならん。幼稚からのひとことをしれ父の教を守りて
成人せし今更に孝子にまで。なかなか後なき不孝とは言ひ辨くるべからず。
言葉まで〔?〕ひなきゝ侍従も実甫なりと思ひとり。我子ながら様々に〔?〕
照天姫は心にもあらぬ孫と母の命なり。乖くべきにもあらざれば
それに從へと心裡は文叔が妻の操も物かはと。想ひ定むぞ健氣なる。
折しもあれ。外の方いと閙しく。注〔?〕よりの使ありと。ひしめきつれば。
侍従母子は縁てその心をしらされとも。さしもなる憂目に遭んずらんと。
思はるゝ孔はともぞ道理ぞ。こゝに家の老僕に美登小四郎なる國と云者あり
なり。二なき忠義のものなるが。前年より兼光の命によりて所領なる常陸
の國に居て百姓のことより萬沙汰あらゆるが。這回主の横死が
聞て大に驚き取る物もとりあへず。晝夜を分ず息もつかずにはやく
今日漸く家に歸り主の館に赴ける所に多くの人数弓長刀を持て
館のめぐりを取り囲めり。こはいかにと驚きさわぐうち。門の裡に入らんと
一人の侍馬に跨り。下知を傳へて言へり横山に居る兄私の意るに非命の死が
いかにとて君が忠らに不忠の罪逃るゝかからず。甚不穏と没收し。その
破却すべしと鎌倉殿の命を蒙り。此地方に立向ひたり一家の者とも
遠くに館をあけて立退べしと呼りあり足踏ならしてと寄ひ着たり一人
詮秀が子。一人左京亮正兼も小四郎は主家の亡ぶを見てさ氣も心も

失果て悶絶して居たりしが忽ち心付とり直し。かゝる大凶ふあつもこそ運命なり。今さら悔て甲斐なしたゞ此上は夫人大里刀禰の上こそ氣はたらしと一人虫兼が馬の前よりとゝみ出てヤア〻〻おのれは篤光が老僕義盛小四郎とやらとりのゆてい。世程常陸國ふ居く〻主の死せるを聞はり。只今ふりのりのこゝ。おのれ門の裡ふ入ることを御免あれ〻〻と述るふ虫兼とうらふり。君の命あり。門の裡へとゝはけまじ。とく去べしと制されば。小四郎尚も分と云れふ。足非常兎と蒙らんと。ムヌくと陳じやうなと。虫兼まなこと扶じ。上意ふ背くハ白痴なり。それ郷よと言のあとかゝとうねと雅兵ホ之かゝつて郷人とと。小四郎今ハ詮なしと。鳴呼聽兵のなき人こゝる。上意ハ免すれ角もあれ我志の遂ざれば。生命とあらなん。一人死んも乱れなし。英雄の途遠ざんと思の力や。抜るもこんなと。近ぢきよりし二人ふ四断ふ斬ふ。尚も近ぢるりめ。そもと或ハ袈裟ゞけ車斬あるいから行梨子割ふ一盞茶附ふ十四五人拠と並へきり伏とり。這小四郎ハ元来武藝勇力に偉き一人に。且そ忠義の為ふ死と極らることなれば。日頃ふまさる太刀風ふ秋乃紅葉ふの木ハ葉武者散て野附ふよりもこそ。小四郎此隙を窺ひそ逃。門の傍の塀と乗越敵の裡ふ走り入隈く残る処もなく。主の行衆衆捜索どもゝ。ゆ方へ〻ちこうろ。甚新ぢふこさりしゝが蔵後ゝる婢女や。老ふ下僕ふ問ねれど。これさへ知ぬと回答。こゝハいうふせんと。たゞとふふこそや一色虫兼人数と引連うち入ゝ。彼輩ハ人数めらしゝが本姓ハと後門より密ふ逃れ主の行衆衆あんと何地と定む方ハ知らんと。ゆ落ふ居ると光模死ふ依。郎反逆人の

勇武
女房の
去向
捜索
義経
四郎

罪科ふ所せらるゝごとくに。使と家人きゆいあゝ程ど。足淫秀が
誘あて一々人亜幕ふ内意と笑へかゝれるらに〻れとるの。それ奈何
縁故ぞといふふ此一件渾く家扶憲実の彩る正るれば。彼が非ゝの
政道ぞと。諸人ふ疑ひを跡うらしめん為れ謀ふてありるとぞ且説
小栗が母とうり名武が鈔ふ使せりの甚回意ば俟く居るりに。
俄ふ所よりの使なりといふどこそめれ。名武が舘ハ門の沸が如く。
騒動大うさるふねが使ハろうくに進を還り。縁故を告知さふ満重
驚きき再び人をかりて光景を窺ふ鈔ハ宜願ようる卒を
言ひ。付後照天の行衆彩れざと報ふに満重易うふねことふおりひ。
人を四方に走りて其在家を捜索るさふ知ることるりる小栗ハ
一人の新婦を失ひ怨角起くど淫をぐるてるとるり。ふに小栗小次郎が

乳母人が茂浪と云ふりけるが。故ハ武州六浦なる海士の妻なり。一人の
女児を産てのち夫なりる死りの没命ぜれば。今日を送るべき生産
なく。女児を人ハ有り。其乳汁あ彩をりて小栗ハ給仕小次郎が
乳母人とハなりけるに。乳母人ハ満重ハ婦ハ。よれ乳母人を彩ふうと云ひ不便を
加へて召使ひに去る年妻の初瀬辞世のちハ満重獨孫の淋しさふ。
茂浪ぞ哀くしく。容貌さ人醜うふ彩べ。ふと彩ふ国の伽とハほしふり。
る世の契やありるん。いく行るく一人の男子を産りる。満重ハ小次郎が
外ふ子ふれべいと頼ことなく思ひ。五十ふあまりを又一子を
まうけさるべかぎりあく喜ひ。名を万千代と呼まて愛されこと
比ひ。かりるれば茂浪が威ものづらにもよ。乳人ふ妻のぶ〻くあぞ

なりゆくれ。爾るに茂浪素賊きりのるふ。且貪欲なる性なりしゞ。俄に我が人よ敬ゐれけるふつけ。驕の心出来。小次郎あるらまゞうはつゞ子万ゐ代こそ小栗が世嗣とゐゝんばくふあとこれより小次郎と踏んぞるふこそ方ゐんゝれかゝとしやどふ時く小次郎がこと。満重ふ譲くゑーつゝふ。満重万ゐ代が愛ゆ暗きされ浸潤の潤層受の恐終へふ行ゐまて。小次郎と悪むとふこそあゝふ彼ゞ。まゝと昔ゐゝ似ゞなりゆきぬされど小次郎ハ孝心源きりのなれば父の疎ゞゝ踏ゞゝ我心の情ゞと尚いやまゝふ孝心そゝゝれ爾るふ今年寛永廿二年。関東の所くふゐゆく。群盗蜂起し。賦税と侵奪し。漁夫の役近擒の蜚と。ひくゞゞし。笑領拉氏ゐゝゝ。孤家家族と評議ありく。在鎌倉の法大名ゝ。領国ゝ下し。速ふ賦徒退治ゞゝと。厳命ありゐるとふ。

各領国へ下りゐふ小栗満重も西部のうち群盗あくふより。速ふ走りゝ所ふ尚射西労ゐかくと。歩行ゞふ彼ゐゞと男児小次郎と代官としてさし下ゐんと。事の由ゝゝ。ゐゞに速ふ免状蒙りしゞさふゞ下さゞゝと想ふふ。小次郎今年十七ゐれど未総角ありて男ふゐふ彼が形ゝ人の用ひもいゞゞと。俄ふ元服さし名と助重と名ゐふしけり。時小次郎父が代官せしとりてこれより世の人。小次郎代。小栗判官代助重とハいひゐなせり。彼ゝ助重ハ父の命と稟ゝ家子老僕数ゐ人ゐ俱し。領国常陸のゞへ走りゐ。

小栗外傳巻之二畢